

核燃サイクルに挑戦



撮影・宮本 明登

ふじいえ・よういち 1935年兵庫県生まれ。東大理卒。阪大助教授、名大教授、東京工業大原子炉工学研究所長を歴任。95年原子力委員会委員となり、98年1月から委員長代理。著書に「リサイクル文明が求める原子力」など。

横山 六ヶ所村の再処理工場も問題を抱えています。建設費は当初の倍以上の1兆8800億円と修正され、今は3兆円以上といわれる。完成予定も2003年からさらにずれ込みそうです。再処理技術は未成熟で、工場が稼働してもトリウムは避けられそうにありません。

原子力委員長代理 藤家 洋一さん

現代文明から脱却を

ニウム利用で痛くもない腹を探られるのはたまらない。藤家 日本の原子力を考える原点は原爆反対と平和利用の二つの流れであり、これらの努力を核不拡散という共通の目標に融合させなければならぬ。平和利用に徹することを国際的にはっきり主張し続けることは、インドやパキスタンが核実験を

がなげできないのか。撤退となると再処理工場を抱える青森県が猛反発するし、原発に使用済み核燃料がたまって各自自治体も強硬な姿勢に転じてしまう。地元への配慮は大切だが、従来路線の踏襲では收拾がつかない状態になってしまわないか。

藤家 「立地」の議論は不可欠の原発は安全というが、地震国

の原子力では立地問題が最重要であり、それをいかにしろにした議論は成り立たない。横山 原子力にはさらに高レベル放射性廃棄物の処理処分という難問が控え、チェルノブイリ原発事故のように安全性の問題もあります。世界的に原子力発電の難しさを考えれば容易

では、記録に残っているような地震には耐えられません。横山 地球環境を守るため大量生産、大量消費、大量廃棄というやり方を改め、リサイクル社会を築くのは大変重要ですが、昨今でも原子力でのリサイクルは、再処理技術や高速増殖炉開発の難しさを考えれば容易

の原発は安全というが、地震国

疑惑を持たれないように「余剰プルトニウムを持たない」と国際公約し、これを守るために今後つじつま合わせが必要で、核兵器廃絶を願う日本がプルトニウムを視野に入れること

実施した後は特に大事です。横山 プルトニウム利用に未

の心配もあります。藤家 米スリーマイルアイラ

の長い研究開発に投資するのは確かに難しい。そんな中であえて原子力も含めたりリサイクル文明の構築が不可欠だと言いたい。石油などの化学反応から核

の長い研究開発に投資するのは確かに難しい。そんな中であえて原子力も含めたりリサイクル文明の構築が不可欠だと言いたい。石油などの化学反応から核

の長い研究開発に投資するのは確かに難しい。そんな中であえて原子力も含めたりリサイクル文明の構築が不可欠だと言いたい。石油などの化学反応から核

核燃料サイクル 資源小国の日本はウラン資源の有効利用によってエネルギーを安定供給することを目的に、原発から出る使用済み核燃料を再処理し、回収したプルトニウムや燃え残りのウランを高速増殖炉や新型転換炉、軽水炉で利用する核燃料サイクルを原子力政策の柱としてきた。

994年にできた。その後には原型炉「ふげん」までいった新型転換炉開発からの撤退、動力炉・核燃料開発事業団(動燃)の高速増殖炉原型炉「もんじゅ」事故、東海再処理工場事故が重なり、長計は実情に合わなくなってきた。

欧米諸国は高速増殖炉開発から相次いで撤退し、日本ももんじゅ事故でつまずいた。当面のプルトニウム利用の柱は軽水炉でのプルサーマルとなり、電力会社は2010年までに16、18

の声を耳を傾けてほしい。藤家 原子力委員会や専門部会はずべて公開です。96年に設けた原子力政策円卓会議の運営役による提言を原子力委員会はほとんど全部取り入れた。今回も新円卓会議から出る意見を原子力開発利用長期計画の改訂や政策決定に反映していきたい。

藤家 豊かな生活を求めてエネルギー消費が伸びているから原子力が必要だというのはなく、ここで我々のライフスタイルを全面的に見直し、環境に負荷の少ない太陽光発電や風力発電などの自然エネルギー開発をどう進めるかの議論が必要でしょう。原子力関係者は何が何でも原子力という考え方を改めてはどうですか。原子力委員会も柔軟になってほしい。

藤家 エネルギーにはそれぞれ役割分担があり、自然エネルギーの開発はどんどん進めてほしいが、私は資源論だけでなく環境論の観点からも原子力は日本の必然の選択だと思っています。今後は新しい時代に合わせて医学、食品科学、宇宙科学までを含めた総合科学技術としての原子力を目指したい。原子力委員会はこうあってほしいという注文があったらぜひ出して下さい。

次回この欄は19日に掲載します。